

RCVS review of the use of telemedicine within veterinary practice

Summary Analysis

内容

- ・ 背景
- ・ 方法論と回答レベル
- ・ 人口統計
- ・ RCVS ガイダンスの修正

リスクの確認

活動ごとのリスク

診療内容ごとのリスク

臨床兆候/症状ごとのリスク

技術ごとのリスク

ライアントとの親密さ/動物種と環境

- ・ 一般的なコメント：遠隔相談、診断、治療
- ・ 遠隔処方
- ・ 遠隔医療のメリット/デメリット
- ・ 遠隔医療：展望
- ・ 遠隔医療：限界

協議を行った理由

新しい技術の参入は、獣医サービスの提供方法に影響を与え、確実に獣医学を変えています。これらの進歩は、獣医学ケアの提供を改善するものですが、その一方で、獣医学業界の人々に様々な課題をもたらしているのも事実です。

遠隔医療…電子通信や情報技術を使用して、遠隔でヘルスケアを提供することは、獣医学分野における新しい臨床分野の1つです。

遠隔医療は、ビデオリンク、テキスト、インスタントメッセージ、電話、またはその他の手段によるリモートでの獣医サービスの提供を含みます。

これまでの遠隔医療は、専門家同士の間での治療に関する遠隔相談、画像の解析、または専門医からの一般の開業医へのアドバイスなど、獣医間で使用することを主な目的として捉えてきました。これらの利用方法は、獣医業界ですでに十分普及しています。

しかし、業界は急速に成長しており、新しい形の遠隔医療が日々開発されています。ビデオ相談やチャットアプリなどの遠隔医療サービスをクライアントにも直接導入しようとしている企業が増えています。

さらに、ペット用のウェアラブル技術などの革新的な製品が急速に進歩しており、遠隔獣医サービスの提供に必要な生理学的データのやり取りも可能になりつつあります。

英国では、遠隔医療 GP サービスを提供する多くの企業が出現しており、General Medical Council (GMC) は、電話、ビデオリンク、またはオンラインによる遠隔処方などの問題について医師にガイドラインを提供しています。

方法論と回答レベル

SurveyMonkey を使用して、獣医学専門家、一般人、およびステークホルダー/組織に対する 3 つの個別の調査が作成され、公開されました。これらの調査の質問事項は、まず RCVS スタッフによって作成され、RCVS 標準化委員会による議論および合意を経て決定されたものです。獣医学専門家への調査および一般人への調査の定量化可能な質問は、まず SurveyMonkey のツールを使用して分析し、その後、Excel にエクスポートし、詳細な分析を行った後、このレポートに組み込みました。

RCVS スタッフのチームは、すべての自由回答を一つずつ読み取り、それらを分類し、分析を可能にするためにコードを割り当てる作業を行いました。同時に、チームは物語分析（ナラティブ解析）を実施し、有用な情報や視点を含む回答や、あるいは遠隔医療のリスクや利点を説明した回答を抽出しました。要約報告書では、これらの回答の抜粋を紹介しています。ただしそれらは、この解析によって得られたすべての解析結果を反映しているものではありません。

獣医学専門家へのオンライン調査では 1,230 件の回答があり、一般人への調査では 229 件、組織/ステークホルダーへの調査では、8 件（うち 1 件は回答が不完全のため無効）の回答がありました。組織/ステークホルダーへの調査のサンプルサイズが小さく、また、1 つの組織が 2 度回答したこともあり、ここでの結果は集計ではなく、「個々の質問にどのように回答したか」を個別に示す形式で表しました。また、英国獣医協会（BVA）、英国小動物獣医協会（BSAVA）、獣医外科医協会（SPVS）、ドッグズトラスト、遠隔医療プロバイダーおよび 1 人の獣医からも書面による回答が得られました。これらの書面によって提出されたテーマと回答も、可能な限り概要レポートに含めました。

人口統計

専門家への調査では、回答者の 88%が獣医、12%が獣医看護師でした。回答者の 55%が「主に小動物の診療」、11%が「紹介診療（他の医療機関に患者を紹介）」、6%が混合診療、6%が教育や研究、5%が「主に馬の診療」に携わっていました。性別の比率としては、58%が女性でした。

一般人への調査では、回答者の 71%が女性でした。飼っている主な動物は、犬（69%）、猫（50%）、その他の小型哺乳類（12%）、馬（9%）および家畜（9%）でした。

過去に遠隔医療を利用した経験について

質問に回答した一般人 221 人のうち、遠隔医療のサービスを受けたことがあると回答したのは、19%（42 件）にとどまりました。同様に、クライアントに遠隔医療サービスを提供したことがあると回答した獣医学専門家は、992 人のうちわずか 34%（334 件）でした。

獣医学専門家がクライアントに遠隔医療を提供した最も一般的なタイプのサービスまたは状況は、既存のクライアントへのフォローアップアドバイス（86 件）、電話によるアドバイス（49 件）、トリアージ（45 件）、一般的なアドバイス（45 件）および写真またはビデオ映像の評価（43 件）でした。一般の人々が遠隔医療サービスを利用する利用としては、利便性（14 件）、安心感（獣医の診察が必要かどうかを知りたい）（14 件）および費用（8 件）でした。

遠隔医療の使用経験についてコメントしてくれた 41 人の一般回答者のうち、75%を超える人が、遠隔医療サービスに満足したと回答しました。内訳は、「満足」（11 件）、「非常に満足」（20 件）でした。

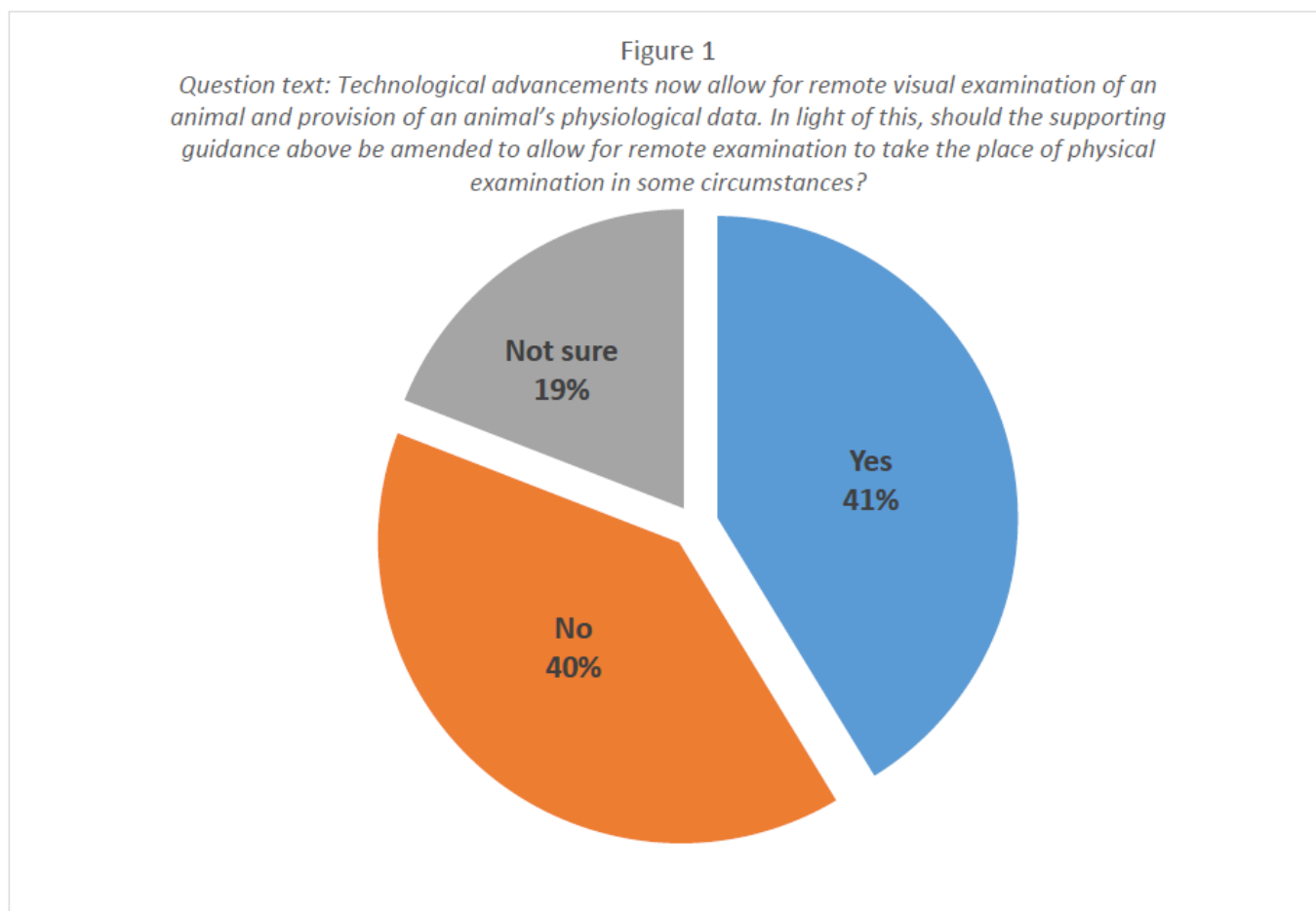
RCVS ガイドンスの修正

図 1 は、特定の状況において、直接診察する代わりに遠隔検査を行えるようにするために、RCVS の「職

業行動規範のサポートガイダンス」を修正すべきかどうかに関する獣医学専門家の回答を示しています。

図 1

質問文：技術の進歩によって、動物の遠隔での視診と動物の生理学的データの提供ができるようになりました。それに伴い、状況によっては遠隔検査が診察の代わりになるように、上記のガイダンスを修正する必要がありますか？



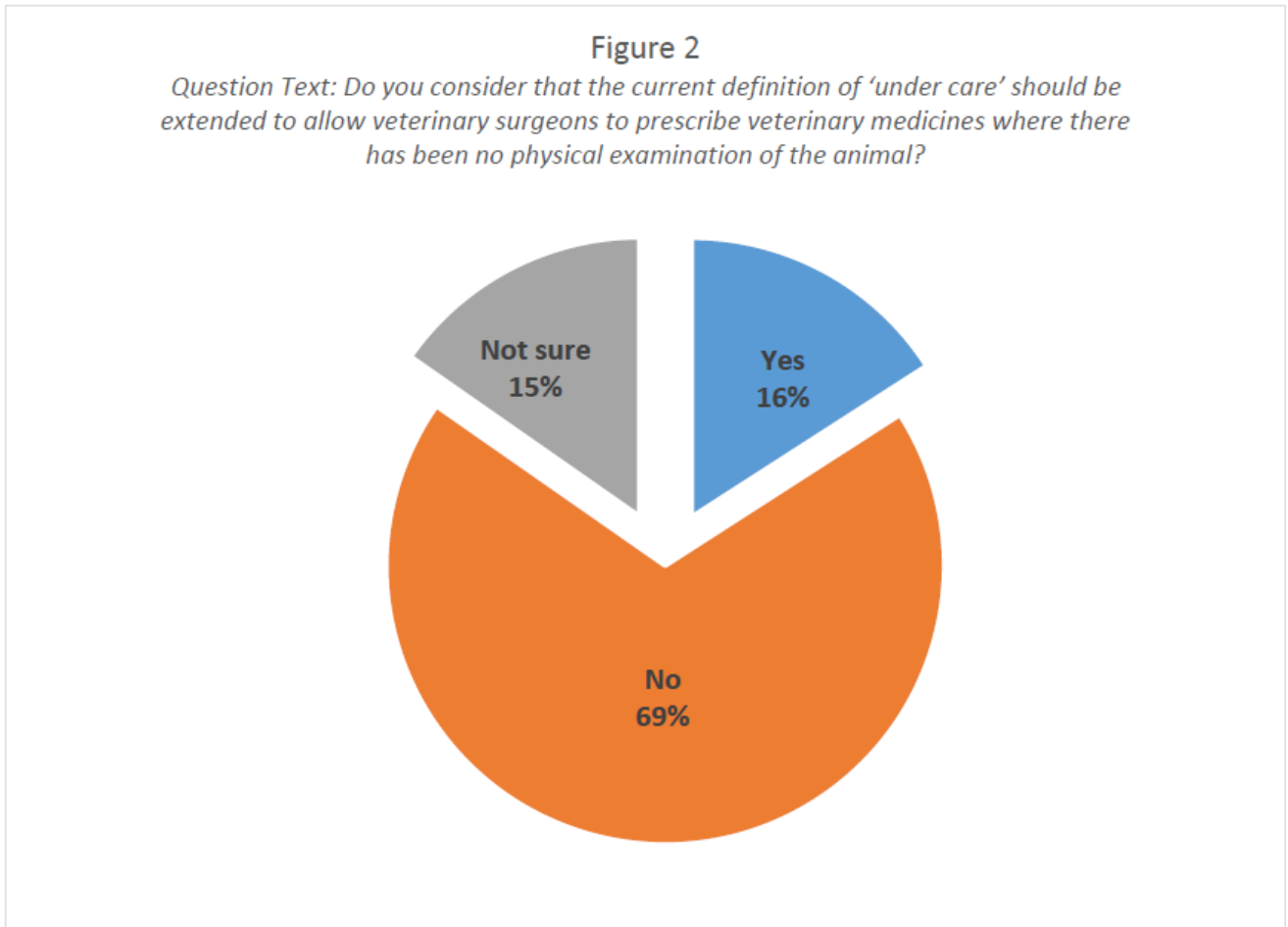
遠隔処方

調査に回答した獣医学専門家の大部分（69%）は、身体検査が行われていない動物に対して医薬品を処方するという目的のために、「獣医の監督下において」という定義を拡張すべきではないとした（図 2）。

図 2

質問文：「獣医の監督下において」という現在の定義を拡張して、獣医による身体検査が行わ

れていない動物への医薬品の処方ができるようにする必要があると思いますか？

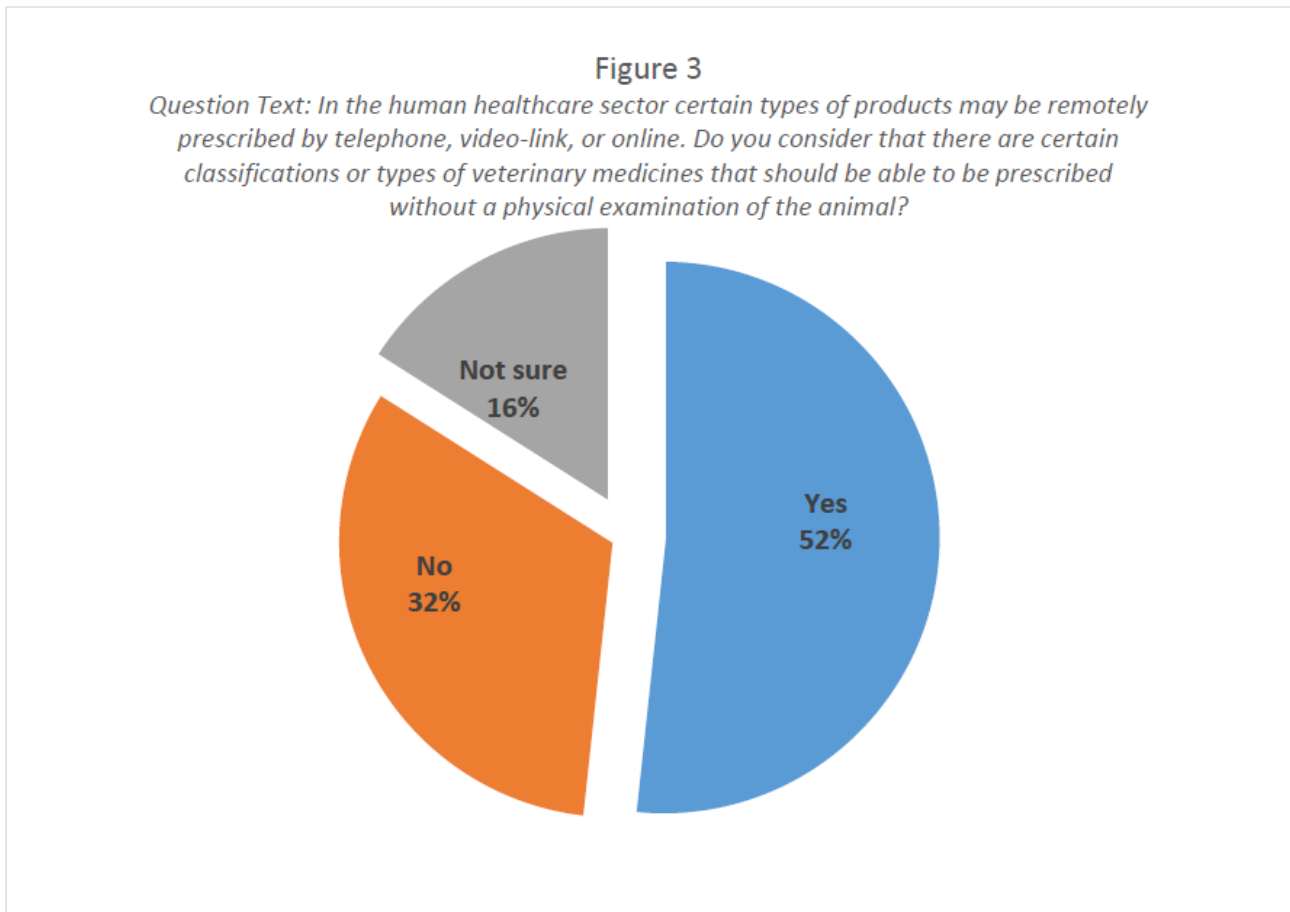


595 人の回答者が、自由記載でリスク評価の根拠を説明してくれました。最も多かった説明は：身体検査なしで処方することは適切ではない（241 件）、重大なリスクを伴う（88 件）、低リスクの薬または状態であれば許容できる（77 件）、獣医が患者の状態に精通している場合、または繰り返し処方を行う場合は問題ない（75 件）、でした。

しかし、特定の種類の動物用医薬品に関しては、動物の身体検査なしで処方することの可否を尋ねると、獣医学専門家の回答者の大部分（52%）が賛成でした（図 3）。

図 3

質問文：人間のヘルスケアでは、特定の種類の薬品が電話、ビデオリンク、またはオンラインで遠隔的に処方される場合があります。動物も身体検査なしで処方できる特定の医薬品分類または種類があると考えますか？



限定された特定の薬品に関する遠隔処方の可否の判断に至った理由を、自由記載で説明したいいくつかの例を以下に紹介します。

遠隔医療を実施するにあたり必要な条件や制限：

- 1) 少なくとも、クライアントとの関係の構築が必要
- 2) 患者の反応をフォローアップできるように、監視および記録するプロセスが必要である

3) 関与する専門家に対する説明責任を果たすことが必要である。

身体検査なしで遠隔処方に適している薬品として駆虫剤をあげました。

遠隔医療のメリット/デメリット

大多数の獣医学専門家（65%）は、一般回答者の61%と比較して、遠隔医療にはメリットがあると考えました。しかしその一方で、圧倒的多数の獣医学専門家（90%）は、一般回答者の56%と比較して、何かしらのデメリットがあると考えました。

次の表は、獣医学専門家と一般人があげた主な利点についてまとめたものです。

メリット：獣医学専門家 731 件	メリット：一般回答者 130 件
遠隔地のため、ペットを連れてこられないクライ アントがアクセスしやすくなる 180 件	動物の移動ストレスを減らせる 32 件
高度な専門家やセカンドオピニオンへアクセスし やすくなる 143 件	コスト低減・出張料削減 31 件
家庭環境で見られるので、不用意に獣医を訪れる 機会が減り、ペットのストレス軽減になる 118 件	便利 24 件
トリアージや一般的なアドバイス、軽微な異常や 予防医療に有用。108 件	安心感・受診が必要かどうかを知ることができる 21 件
より効率的で便利（獣医とクライアントにとって） 108 件	獣医に見せるまでのスピード 15 件

遠隔医療：将来の展望

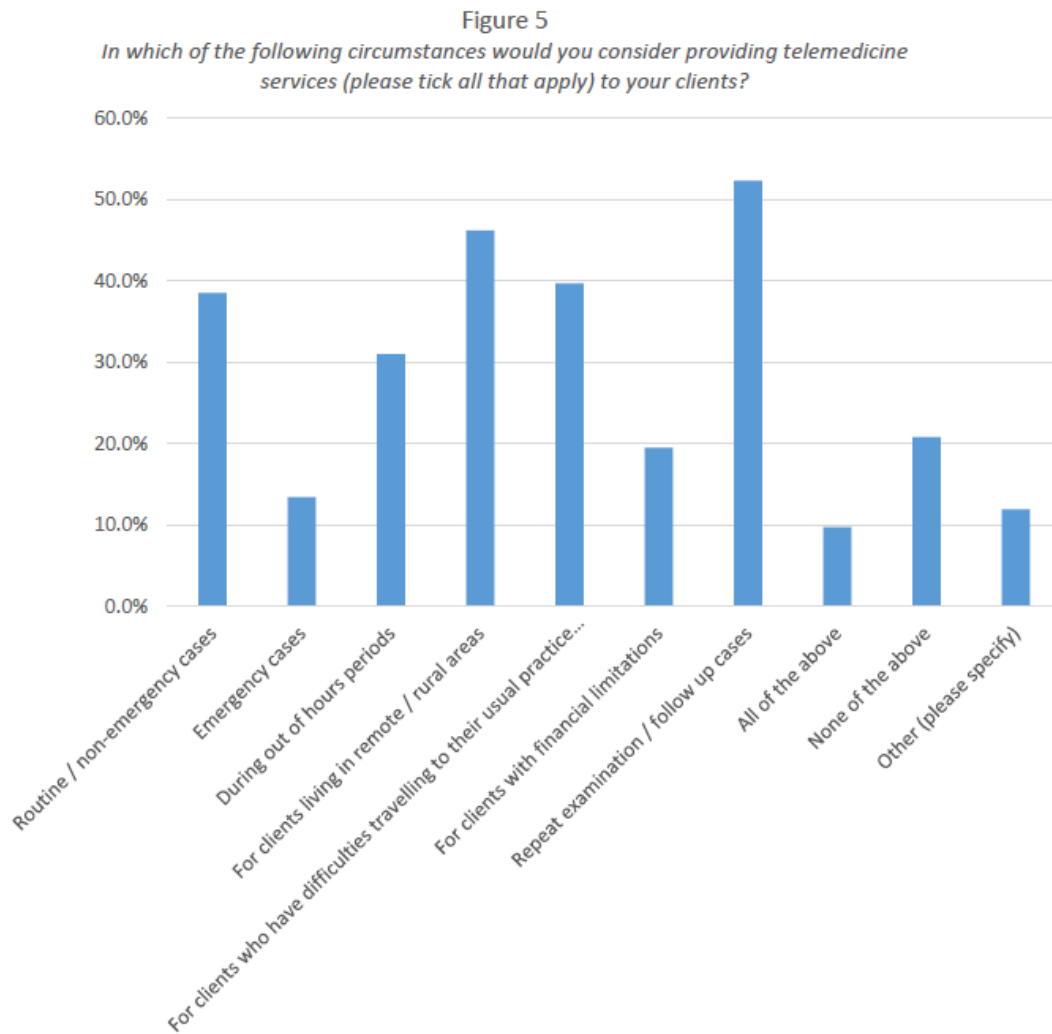
一般回答者に、将来、遠隔医療サービスの使用を検討するかどうかを尋ねたところ、49%が肯定的に回答し（88件）、29%が「わからない」と答えました（51件）。

自由記載で寄せられた83件のコメントのうち、遠隔医療の使用を検討しない理由として最も多かったのは、動物の身体検査の必要性（29件）であり、一方、遠隔医療の使用を検討する理由として多かったものは、スピードと利便性（11件）でした。

図5は、特定の状況で遠隔医療サービスの提供を検討する獣医専門回答者（995件）の割合を示し、一方、図6は、特定の状況で遠隔医療サービスの使用を検討する一般回答者回答者（178件）の割合を示しています。

図5 次のどの状況で、クライアントに遠隔医療サービスを提供することを検討しますか？（該当するものすべてにチェックを入れてください）

棒グラフ X 軸左側から ルーティン/緊急でないケース、緊急のケース、時間外、クライアントが遠隔地/田舎にいる、クライアントが通常の通院ができないとき、経済的に苦しいクライアントのため、繰り返しの診察/フォローアップの場合、上記のすべて、上記以外、その他（詳細を記載してください）



9.遠隔医療：限界

圧倒的多数の専門的回答者 92%（896 人）およびこの問題に関して直接回答したすべての組織は、獣医の専門家が提供するサービスの限界をクライアントが理解できるように、クライアントに情報を提供する必要があると考えました。

※原文より一部抜粋して翻訳、編集をしております。より詳細は、[会員専用ページ](#)、もしくは原文([RCVS review of the use of telemedicine within veterinary practice](#))をご覧ください。